〔わたしと美術館〕

古美術品の撮影法（1）絵画作品

美術写真家　中 川 邦 昭

美術、歴史ブームとかで、書店で美術作品をあつかう本が目立って多くなりました。この種の本の出来、不出来は内容は別にして、図版のよしあしが大きく関係します。ところがその図版のよしあしは製版、印刷以前の美術写真の質に負うところが大なのであります。

動かない被写体を撮る美術写真は、一瞬のシャッターチャンスがものをいう報道写真などとは、違ったものと思われ、特殊な写真のように考えられがちですが、実は本質的には同じであります。美術写真といえども、撮影の機会や撮影時間は制限されており、制限の中で最良の仕事をしなければならないからです。国宝や重要文化財に指定されているものの撮影はその制限はとくにきびしいといえます。

美術品はかたちの上で彫刻や工芸などの立体的なものと、絵画や書蹟などの平面的なものとに大別されます。美術品の撮影はそれぞれのかたちに応じて工夫しなければなりません。今回は平面的な絵画作品の撮影法について述べてみようと思います。

まず本撮影に入る前に、やっておかなければならないことが二つあります。

その一つは被写体の絵がどのような材質でできているか、またその画面の大きさはどのくらいかを確かめておくことです。東洋画についていいますと、本紙（画面にあたるところ）には紙あるいは絹布が用いられ、水墨や岩絵具や植物性顔料（藍や紅など）で描かれているのが普通です。そして、東洋画に多い軸装（掛幅や巻物）は一度開いてみなければ画面の大きさがわからないという特徴をもっています。これらを確認することはライティング（照明）をするときの目安になります。

もう一つは材質、大きさを見ることとも関係しますが、絵がもっている全体的な雰囲気を的確に摑んでおくことです。焼付された作品の中に、その雰囲気が十分に盛り込まれていたら、その写真は美術写真として成功しているといえるでしょう。美術写真が単なる複写と違うのはこの点にあります。

作品の特徴を見て、いよいよ撮影にとりかかることにしましょう。

古美術品はどのようなものであれ、長い時代を経てきたものが多いもの、大変こわれやすく、また高価なものですから、その取扱いには損傷することがないように細心の注意をはらう必要があります。そして、美術品の安全の上からも、撮影はできるだけ短時間のうちに完了するようにこころがけねばなりません。そのために、本撮影に入る前に、映画やテレビと同じようにリハーサルを行うことも一案です。実物の代わりに、それと同じ大きさの代用品（画用紙、ダンボール紙、布など）を使ってテストを行うのです。

まずライティングについていうと、ライト（タングステン灯）は作品とカメラとを結ぶ線に対して45度の角度の位置に置きます。これが平面的なものを撮るライティングの基本です。これを基本にして、たとえば絵に金箔や金泥、あるいは雲母（きらら）が使われていて、その光沢を出したいときにはライトの位置を45度より小さくします。つまりライトをカメラの方に近づけます。また45度より大きな角度の位置にライトを置きますとより光量の均一なライティングが得られます。これらを基本にして、なるべく光が均一に当るようにするのが第一に大切なことです。特に画面が竪長の掛軸は２灯では光の平均がなかなか難しいので４灯に増したり、また横長で大画面の屏風は６灯で撮る場合もあります。

次にカメラは画面正面の中心点に置きます。カメラだけに気をとられているとなかなか思うようにいかないものですが、カメラから少し離れた所から見れば、中心に来ているかどうかは割合簡単にわかります。人間のこの種の感覚は十分信頼できるものです。

さて、作品の代用品となる物を置き、ライティング、カメラの位置が決まりましたら、いよいよ露光時間を決めます。こういった場合、なるべく作品にライトの熱が当たらないようにするために、スライダック（電気の変圧器）という便利な用具があります。このスライダックを使って、ライトの電圧を下げておいて作業し、撮影の直前に十分な電圧にします。ただし、代用品を使っているときには、十分ライトを当てて光の平均を見ます。実際にいいますと、たとえば竪長の掛軸の場合は画面の上下を少し明るく、中心を暗くしておくと、結果としてよいものが得られます。それはレンズの性質のためです。つまり、レンズの中心と端とでは通過する光量が異なり、端の方が中心のところよりわずかながら光量が少ないのです。それで、フイルムに光を均一に当てるために、あらかじめ作品の端の方を少し明るくしておくのです。

以上でテストは終わりましたが、決して気をぬくことなく、平常の心で作業を行うことが必要です。

これからの手順は、たとえば４×５インチの大型カメラの場合、まずスライダックで電圧を落してから、実物を置き、次にファインダーを見て、ピントを合わせ、しぼりを確認します。すべてＯＫなら、フイルムを装填し、シャッターをチャージします。シャッターを押す段になってはじめて、スライダックの電圧を静かに上げてやります。100ボルトまで来た時に、シャッターを切り、それが終わったら、電圧を下げてやります。これで撮影は終わりです。

そして撮影済のフイルムは現像され、焼付の過程を経て、美術写真ができあがるのです。

フイルム現像と焼付については紙面の都合でここでは触れませんが、一つの作品がフイルム現像と焼付の調子を変えることによって、どれだけ違った写真になるか、参考までに、大和文華館所蔵の伊藤若冲筆「釣瓶に鶏図」で示しておきます。（日本写真家協会会員）

軟調焼付

適正焼付

硬調焼付

釣瓶に鶏図　伊藤若冲筆　大和文華館蔵

季刊 美のたより No.59
昭和57年 5月 27日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.